



発行2009年11月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
ハンザキ研をめぐるスター⑬

カジカ

カジカというと、あの涼やかな声で鳴く溪流のカジカガエルがお馴染みでしょう。夏の夜に、ハンザキの調査をしていると近づく光に警戒して鳴きやみ、水面から出ている岩の上にへばりついているような姿をたびたび見かけます。灰色がかった地味な体色のカエルです。一方、水槽の中の見栄えのしない10センチほどのハゼのような魚を、これがカジカですというと「鳴くんですか?」という質問が返ってくるのが再々です。残念ながら、魚類のカジカは鳴きません。そもそもはカエルの長い名前を省略して“カジカ”が鳴いているなんて言うことから誤解が起きるのだと思います。昔は、溪流に生息しているカジカは1種類と考えられていましたが、孵化した稚魚が海へ下る小卵型と一生を河川で過ごす大卵型とがあります。生野ダムで分断された当地では、後者のカジカが谷川に多く見られます。



カジカは、溪流の石の下などに卵を産み付けて、オスが守ります。卵塊は平べったく互にくっついていますが、これを産卵期の春に採取して塩漬けにしておき、溪流魚釣りの餌にすると、釣果抜群だと自慢している人がいました。大量の塩漬けを見てこれではカジカもたまらないなと思いました。現在では、その数が減少してしまい、絶滅危惧種として兵庫県ではBランクに指定されています。体は多くの粘液にくるまれていて“オダレクイ”という呼び名を揖保川の主に聞かされました。“オダレ”は“ヨダレ”の変化したもので、体表の粘液の多いことを表現しています。水槽の中では、底砂と同じような体色になってジッとしているので気がつかない人も多いのですが、谷川の礫底の石の陰などでひっそりと暮らしている魚ですが、アップの顔は意外とユーモラスですね。



写真1 黒川エコツアー（左から3人目が岡田講師）



写真2 湯原町の全長170㌢の巨大中国ハンザキ



写真3 瀬戸市の観察会、35㌢の次世代のホープ初登場



写真4 右鰓水生菌で死亡したカモガワ・ハンザキ幼生



写真5 淡路南端沼島のウミウ越冬地・上立神岩付近



写真6 沼島・神宮寺庭園は県指定史跡になるか？

秋季におけるハンザキ 7 夜連続調査

研究員 田口勇輝

ぼくはハンザキの生態と保全に大きな関心があります。5 年前に大学院で偶然ハンザキの研究を始めることになったのですが、今ではすっかり彼らのもつ魅力の虜になってしまい、しばらく調査に出ていないと夢にまでハンザキが出てくるほどです。私事ですが、今年の 9 月に「オオサンショウウオの生息地評価と保全計画」という表題で博士論文をまとめ学位をいただきました。研究としてのレベルはまだまだ低いことを認めざるを得ませんが、これからこのようなことに関わっていききたいという所信表明のような感じで、今後の研究や保全活動を行っていききたいと考えています。それらを行っていく上で、日本ハンザキ研究所が、ぼくにとって絶好の場所であることは言うまでもありません。

2009 年の 9 月にハンザキ研を使わせていただき、第 2 回のハンザキ 7 夜連続調査を行いました。この調査では、200m の調査区間を夕方 18 時から朝 6 時まで 2 時間に 1 度踏査するというのを 1 週間続けて、夜行性であるハンザキの出現状況を記録します。個体の自然な出方を記録するため、棒の先にマイクロチップの読み取りセンサーがあるアンテナリーダーを用い、個体を捕獲せずに（個体への影響を最小限にして）チップの ID 番号を読み取ります。そのような調査を行うことによって出現パターンの解明や出現場所の定量化を行い、効果的な調査時間の提案を行うことが、この調査の主な目的です。

実は 3 年半前の 2006 年 4 月にもハンザキ研で、同じ調査を行いました。前回の調査では 35 個体を識別したのですが、このうち 7 日連続出現した個体はわずか 1 個体で、過半数の 18 個体が週に 1 度しか出現しないという結果でした。平均すると 3 日（正確には 3.0 日）に 1 度の出現率となり、栃本先生が 3 日連続の調査が必要と提案されていた裏づけを取れたこととなります。ただし、1 度の調査結果からでは説得力に乏しい。今回の調査でも同じような結果になると、ハンザキの平均的な出現率について説得力が増すこととなります。

結果から言うと、やはり 3 日（正確には 2.6 日）に 1 度の出現率ということが再確認されました。今回は前回よりも多数の個体が出現したこともあり、春季よりも出現率は高く、200m で 58 個体を識別。このうち 7 夜連続出現の皆勤賞は 2 個体、週に 1 度しか出現しないものは 18 個体でした。まだ詳細な解析は行っていないですが、春季と秋季という 2 つの季節で調査を行っても、“この程度の出現率”しかない、という結論だと思います。

興味深かったのは、今回皆勤賞をとったうちの 1 個体が、実は 3 年半前にも皆勤賞をとった全長 825mm の個体だったことです！多くの個体がほとんど出現しない“超省エネ生活者”なのに対し、この個体は何と食欲なのでしょう。もしかしたら食欲なのではなく、単に狩りがとても苦手なだけかもしれません…。平均的な行動パターンとともに、このような個性も見えてくるのがフィールドワークの醍醐味です。これからも色々な調査から明らかになってくる、ハンザキの不思議な世界をご紹介しますと考えています。

真庭ハンザキ・ミーティング

オオサンショウウオの会は来年の第7回大会を、岡山県真庭市で開催されます。真庭市は、旧真庭郡の町村が合併してできましたが、その中でも湯原町はハンザキ研究のメッカと言ってもいいでしょう。世界で唯一の“ハンザキ保護センター”があつて、明治時代には東京帝国大学の石川千代松博士がハンザキの研究を行ったと言う由緒ある地域なのです。更に、大ハンザキを退治して、たたりを受けたために“ハンザキ大明神”を建立したという所です。私もオオサンショウウオの調査を開始するに当たって、昭和50年に当地を視察しました。保護センターの松尾指導主事から色々な話を聞かせていただきました。中でも、10月末に孵化した幼生は「冬中何も食べない」と言う話は半信半疑でしたが、その後の調査で事実であることが理解できました。

それ以来、何回かハンザキ保護センターには行きましたが、松尾先生の後任がおられず、町役場の方が朝晩開け閉めするだけと言う惨状になってしまったのです。生き物を飼育している施設に専任の飼育担当学芸員がいないと言うことは考えられません。こんな状況で、貴重な石川博士の標本が瓶は倒れ解説が裏返しになったまま、一部の標本瓶は割れて中のハンザキが干物になっていたりしました。標本そのものの価値は石川標本が明治時代から残されているということに尽きます。価値観が分からないとこんなことになってしまうのだと、湯原町の職員の方にきちんと保存展示してくださいとお願いしました。実は、ハンザキ大明神も廃棄寸前だったものを、石川先生が私財で購入して現在に伝えられていると言う話でもあります。

このように、真庭市ではハンザキに対する意識が低いことが気になっていました。まあ、いづこも同じですが、ハンザキが生息する地域ではその貴重さに気が付かないというのが普通です。ですから、私は湯原に行くたびにこれらのことを繰り返して関係の方々に啓発してきました。ちょうど、来年のオオサンショウウオの会の開催地を引き受けていただけましたので、これを機会に一段の整備と専任の職員の配置が期待されます。ハンザキ研究の発祥の地としての真庭市湯原町のシンボルとなると共に、本当にハンザキを保護することができるように、調査研究が進むことを望んでいます。

それにしても、このハンザキ保護センターに飼育されている中国ハンザキの巨大なことにはびっくりするほどです。従来の狭い水槽に収容されている時にはなんとなく大きいなど見ていたのです。今回、来年の大会についての会合が11月25日にありました。この時、新設された円形水槽に移されていた中国ハンザキは170㍎に達しているほどのサイズでした。蒜山観光ドライブインに展示されているオオサンショウウオの標本は、実は中国ハンザキで全長164㍎の大作としてギネスブックに申請中との解説が出ていました。この点からも保護センターの中国ハンザキは貴重なものだと思います。世界最大の両生類として日本産と中国産が全長150㍎になると言われてきましたが、どうも世界一の座は中国に奪われそうです。ちなみに日本産では150.5㍎が最大記録です。中国ではどうでしょうか？

高齢者大学での講演会

昔は老人大学などと言われていたようですが、語感が良くないとかで言い換えただけです。現役をリタイヤーしてからの生きがいを求めた多くの人が集まっている学び舎になっています。先月に1度、今月は6・7日と連続しての講演会の講師を務めました。東加古川の兵庫県いなみの学園は500人ほどの皆さんの前での話しになります。今回は在学生に対する講演ではなく、卒業生の研修会と言うことでした。高齢者大学を卒業した後にも、研修会を実施していると言う向学心に燃えた集団です。

先月と今月6日の2回は、兵庫県但馬文教府みてやま学園で、それぞれ30名ほどの教室でした。両日共に、他の講座もあったそうで会場は大変な賑わいと活気にあふれた高齢者の人々が行きかかっていました。私も、地域の老人会への入会を誘われていますが、目下はフィールドワーカーとして全力を注いでいる所であり、参加していません。

いなみの学園とみてやま学園の双方とも大変話をしやすい雰囲気なので、喜んで講師を引き受けています。何しろ素晴らしい聴講生ばかりなのには感心させられます。私は本来人前で話をしたり注目されるのが苦手な人間であり、できれば壇上になどに立ちたくないのが本音なのです。しかし、仕事柄やむなくそう言う立場に立つことが多くなりましたが、いつも大変に緊張しているのです。しかし、高齢者大学の皆さんの熱心な態度、敏感な反応に接すると、こちらもついつい話に力が入って緊張感の方がどこかへ行ってしまいます。講演のあとの爽快感は、高齢者大学の皆さんのおかげだと思っています。

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

“めっちゃおもしろい黒川秋の陣”はハンザキ研のある黒川地区の本村と呼ばれる最奥部地域の皆さんが総出で村の活性化を目指してのイベントです。すぐそばの畑から抜いてきたばかりのダイコンなどの直売、アユやアマゴの塩焼きなどの屋台が並ぶ。私も何回かはハンザキの話をして池の中に作られた水上ステージで行って来ました。過疎化の激しい山間部の黒川地区ですが、旧・生野鉦山から奥の地域の“奥銀谷地域自治協議会”に属しています。一方に、生野町中心部の自治協議会もあって、それぞれの環境での町おこしを図っている所です。

町の中心部に六区と言う自治組織があり、その中に60歳前後の男性の会“六和会”があります。このメンバーが黒川の祭りを盛り上げようということになり、バスでハンザキ研まで来て、オオサンショウウオ保護センターのハンザキを見学し、その後、黒川本村までの3kmを歩くと言うイベントを計画しました。ハンザキ研に到着した皆さんはアルコールで上機嫌でしたので、その後のウォーキングは大丈夫かなと少々心配しましたが無事に到着されたようです。これは離れた地域間での互いに盛り上げ現状打破を試みようとする意気を感じさせられました。自分たちにできることをやっといこうということだと思います。

ハンザキ研日誌

2009年11月

- 1日 ハンザキの孵化をビデオ撮影 (柿木研究員)
- 2日 ・夜、初雪
・田口研究員・長谷会員と夜間調査 (9月の7夜調査の補填3) 10個体
- 3日 ・“黒川秋の陣”でハンザキ研のブース設営、田口勇輝研究員解説
・生野町六和会23名、見学に来所
・カモガワ・ハンザキ8個体収容 (田口研究員他搬入)
- 5日 9月15日収容の流出卵の孵化終了 (約30匹)
- 6日 ・292回調査終了 (10月25日～)
・但馬分教府高齢者大学みてやま学園 (豊岡市)にて講演
- 7日 県高齢者大学いなみの学園 (東加古川) 卒業生研修会にて“あんこうと村おこし”の講演
- 9日 兵庫県文化財保護審議会史跡名勝天然記念物部会現地調査で南淡路市沼島の神宮寺庭園の審査に
- 10日 第293回調査開始 (～22日)
- 11日 ・オオサンショウウオ月例定期健康診断 (柿木研究員・大江副住職・他2名)
・大雨で8月以来5回目の大出水
- 13日 ・ひょうごエコフェスティバル展示準備で豊岡市へ (事務局長他2名)
・田口研究員他夜間調査 (9月の7夜調査の補填4) 4個体
- 14日 ・ひょうごエコフェスティバル1日目 (事務局長・田口研究員他計5名)
・ホクコンの田中義人氏 (会員) 他ハンザキ・ブロックの検討に
・秋のトレッキング雨天のため中止
- 15日 ・黒川エコツアー実施、岡田純講師の解説、参加8名
・ひょうごエコフェスティバル2日目 (柿木研究員他3名)
- 16日 日本工科専門学校田中科长・兵庫県立龍野北高校山内教諭来所
- 19日 朝来市立山口小学校5年生29名総合学習にて来所 (大田教諭他引率)
- 21日 田口研究員他夜間調査 (9月の7夜調査の補填5) 6個体
- 22日 ・瀬戸市主催の“オオサンショウウオ講演会”と蛇ヶ洞川の夜間観察会
(栃本・柿木・田口・長谷参加)
・第293回調査終了 (11月10日～)
- 24日 第294回調査開始 (～12月15日)
- 25日 真庭市ハンザキ・ミーティングへ (栃本・奥藤・池上)
来年のオオサンショウウオの会について会議、桑原・足利 (広島) 岡田 (鳥取) 氏など16名参加
- 28日 月例事務局会議 (6名) ハンザキ研ニュースNo.46 発送
- 29日 カモガワ・ハンザキ幼生1個体右鰓水生菌のため死亡